

# 介護職員自己評価表

2021年12月13日

事業所名	介護老人福祉施設 喜入の里ユニット
------	-------------------

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	1人	
あん摩マッサージ指圧師	1人	3人
看護師	3人	1人
介護福祉士	9人	4人
実務者・初任者研修	3人	

※複数資格者含む

## ◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よくできている	なんとかできている	あまりできていない	ほとんどできていない	備考
前回の課題に関する改善	0.0%	52.1%	24.8%	23.1%	

前回の改善計画	改善が求められた事案として、①ご入居者に合わせた適正なユニット構成、②生活歴や日常の行動パターンの把握、③ご家族との関係性の確保、④小集団での認知症ケアの実施、⑤コロナ禍によるスタッフ負担の軽減を計画した。コロナ禍の感染対策からご入居者とご家族との関わりをオンライン面会等で代替し、日頃の暮らしを映した写真に手紙等を加えて届けることで、ご家族が少しでもご入居者の暮らしを把握してもらえるようにした。一方、パネルやガラス越し面会への要望も多く、必要な機器導入と体制を整備し10月18日よりご案内できるようにした。認知症や医学管理に関する知識の習得として、外部講師による社内研修を定期的におこなう計画とした。自己評価が低い介護職員がみられ、スーパービジョンにあわせて人事部の面談を計画した。
前回の改善計画に対する取組み結果	適正なユニット構成は、ご家族を交えて検討したが、環境変化のリスクもあり、あまり進まなかった。生活歴や行動パターンの把握は、関わりを増やしたことで概ね達成した。ご家族との関係性の確保は、10月18日よりパネルやガラス越し面会を案内できるようになった。担当の介護職員が立会いながら元気な姿に間近で会えるようになり、「心が通った」「母の変わらない表情にあえてよかった」など、評価する声を多くいただいた。小集団の認知症ケアの実施は限定的な改善に留まった。コロナ禍によるスタッフ負担は、高頻度のスーパービジョンにあわせて、業務から独立した人事部の個別面談で不安やストレスの解消を図った。

## ◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)	よくできている(60以上)	なんとかできている(50~59)	あまりできていない(40~49)	ほとんどできていない(39以下)	合計
SECTION 1 対象者の接し方や態度について	0.0%	54.5%	27.3%	18.2%	100%
SECTION 2 仕事上の態度について	0.0%	54.5%	27.3%	18.2%	100%
SECTION 3 食事について	0.0%	54.5%	18.2%	27.3%	100%
SECTION 4 移乗や移動について	0.0%	63.6%	9.1%	27.3%	100%
SECTION 5 排泄について	0.0%	63.6%	9.1%	27.3%	100%
SECTION 6 入浴について	0.0%	45.5%	27.3%	27.3%	100%
SECTION 7 着替えや整容について	0.0%	36.4%	36.4%	27.3%	100%
SECTION 8 服薬について	0.0%	36.4%	45.5%	18.2%	100%
SECTION 9 意思疎通について	0.0%	54.5%	18.2%	27.3%	100%
SECTION 10 行動障害について	0.0%	54.5%	36.4%	9.1%	100%
SECTION 11 普通の生活やアクティビティについて	0.0%	54.5%	18.2%	27.3%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	生活環境は、ご入居者が話したいときに話せる環境づくりを、「ちょっとした声掛け」を増やすことで構築する計画とした。加えて、生活歴や性格等を把握したうえで、ご家族から預かった写真や手紙を使ってご家族の日頃の暮らしを伝える支援をおこなった。結果、不穏や拒否が減り、穏やかな生活に繋がっているご入居者が増えた。生活リハビリを加えたレクリエーションや少人数でも取り組めるミッケルアート回想療法などを2~3人の小グループで紹介する計画としたが、参加するご入居者は限られた。認知症レベルによっては、回想療法に不向きなケースがあり、表情解析に基づいた「デジタルセラピーSOLO」を導入しQOLの改善を図った。「デジタルセラピーSOLO」は、肉眼で認識することが難しい無意識のうちに瞬現れては消え去る微細な顔表情の動きを用いて、幸福を感じる最適な動画コンテンツを、タブレット等を介して提供するデジタルセラピーになる。結果は、幸福度を示す指標の上昇だけでなく、周辺症状の緩和など、QOLの向上が示された。スキルに頼らず個別介入できることもあり、介入機会と対象者を増やす必要があった。
	主任 水枝谷 芳文

外部評価者	入所施設の満足度調査を行い、示された課題について、プロジェクトチームを立ち上げ改善していました。コロナ禍の収束にあわせて設備を整え、ガラス越し面会を実施するなど、速やかな対応は評価できます。昨年課題に挙げた小グループで行う活動は、認知症レベルに応じた支援は確認できましたが、グループで行う支援はみられませんでした。認知症ケアの実施は、介入例は少ないものの、回想法だけでなく、表情解析に基づいたセラピーが提供されていました。表情の乏しい重度の要介護者においてもBPSDの減少など一定の効果がみられたようですので、効果をケース会議等で検討することをお勧めします。介護職員の教育は、外部講師による研修が複数提供されていました。新人から中堅職員を対象に、資格と経験年数に合わせたカリキュラムが準備され、よりよい支援を目指す教育体制が整っていました。一方、介護職員の評価は、自己評価が低い介護職員が経験年数に関わらずみられました。コロナ禍で支援や勤務が複雑になっていることも影響していると思われるので、面談の手法や頻度だけでなく職員が相談し易い環境についても検討し、介護職員が抱える課題を整理したうえで改善する必要があるようです。総合的な評価は、コロナ禍においても、入居者にあわせた支援が提供され、介護職員に対する専門的な教育と研修が行われていることが推察できました。これからも、地域に根ざした事業所として頑張ってください。
	〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37番1号 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 社会福祉学博士 岩崎 房子